

来院までの日数, CT診断の有無, 手術, 組織所見などに関して, 検討した。

12 血便を伴い, 激しい右下腹部痛を呈した1例

村田 大樹・新田 幸壽・内藤 真一

月岡 恵*・飯沼 泰史**

新潟市民病院小児外科

同 消化器科*

同 救命救急センター**

症例は14歳女児。突然の心窩部及び右下腹部痛と下痢下血が出現。近医より当院に紹介された。体温36.3℃。右下腹部に圧痛と筋性防御, 反跳圧痛あり, 急性虫垂炎が示唆された。しかしCTでは上行結腸から横行結腸の広い範囲に壁の肥厚を認め, さらに血液所見では白血球10700 CRPは陰性であった。以上より大腸炎を疑い保存的に治療を開始した。しかし入院後も血便は続き, 腹痛は激しいて頻回の鎮痛剤の投与を要した。入院後, 下部消化管内視鏡を施行したところ, 虫垂入口部から横行結腸までの著明な発赤と粘膜下の浮腫を認めた。後日便培養にて腸管出血性大腸菌(O-157)感染症であることが判明した。本症例は臨床経過, 画像所見が興味深く, 考察も交えて報告する。

13 腸管膜嚢腫の3例

金田 聡・広田 雅行・内藤万砂文

長岡赤十字病院小児外科

最近, 当科で経験した腸管膜嚢腫の3例を報告する。

〔症例1〕2ヶ月女児。哺乳力低下, 嘔吐にて発症, 著明な炎症所見も認めた。エコー, CTにて感染を伴った消化管重複嚢胞(2ヶ所)の診断となり, 手術を施行した。それぞれ空腸及び回腸の腸管重複症であった。

〔症例2〕2ヶ月男児。在胎15週より胎児エコーにて腹腔内嚢腫との出生前診断がついていた。出生後, 症状は認めないが増大傾向にあるため手術を施行した。結腸の腸管膜嚢腫(病理所見では腸

管重複症)であった。

〔症例3〕7歳男児。繰り返す腹痛にて来院した。エコー, CTにて最大径8cmの腹腔内嚢腫を認め, 手術を施行した。空腸腸管膜リンパ管腫であった。いずれの症例も, 術後経過は良好である。

14 出生前診断され根治術後16年目に左肝内結石形成を認めた先天性胆道拡張症の1例

田中 真司・窪田 正幸・八木 実

奥山 直樹・大滝 雅博・山崎 哲

白井 良夫*・畠山 勝義*

新潟大学大学院小児外科

同 一般消化器外科*

症例は16歳女性。妊娠34週に胎児超音波検査にて腹部腫瘤を指摘されていた。出生後, 先天性胆道拡張症Type IV-Aと診断され, 12生日嚢腫切除, 肝管空腸吻合を施行された。術後13年までフォローされていたが, 特に異常を認めなかった。2004年5月, 原因不明の発熱を認め, 血液検査では異常は認めなかったが, 腹部CTにて結石形成を伴った左胆管拡張および左葉萎縮を認めた。PTCD造影所見では, 左胆管分岐部狭窄が疑われた。根治性を考慮して肝左葉切除を施行した。結石の認められた左胆管基部に膜様物が存在し, 今回の胆管拡張と結石形成の原因となっていたものと考えられた。文献的考察を含めて報告する。

15 早期から症状を呈し手術治療した乳児総胆管拡張症の2症例

内山 昌則・小山 高宣*・長谷川正樹*

武藤 一朗*・青野 高志*・岡田 貴幸*

須田 昌司**・小嶋 絹子**

高地 貴行**・加藤 智治**

県立中央病院小児外科

同 外科*

同 小児科**

乳児期早期より発症した総胆管拡張症2例を手術治療したので, その特徴を報告する。

〔症例1〕生後8ヵ月女児。生後3ヵ月頃より腹